



中村俊定文庫
文庫 18
351





序

洪範五福壽居第一若戚

長終壽亦不壽難亦得壽

也丁丑一春和木翁杖于園

翁之為人豪邁不群謀農

之暇、揮花鼓、喜樂、白、余
句陽、乎、其樂、此翁、於壽
也、真得其壽哉、於是賓、勿
上壽、諧歌成篇、今茲適將上
諸梓、余嘉其老益壯、書以贈
之云

寶曆戊寅春三月

鹿兒川清田氏書





百韻

播陽加古驛水田氏



七旬乃始きききや鶉の聲 和木

海山を修ふ葉の葉子 瓢水

為し候其或打新を儀あんて 五百枝

此日くり幸をまきく 復雲

名月の風情有りに庭の鹿 三樂

山の向し降る秋の清く之 松根

三玉座の儀の八歳と集りぬ心 巴州

石に赤くけりも壽の音 帆葉

穿りよる影に雲見り海原 瓢水

へりて老ずし喜に舟 縁 和木

津心と立 福と免 勢力 掛 菊州

空をよると満たに 雲々と 木皮 如柳

苔の枕 一生志とぬ 葉 門 嶺南

鳥の心もせと 梅 斗る 福宜 守之

籠り古 鞠聲 吹ぬと 春 針心 富門

石 新とくけし 櫛と 風 呂 東列

甲の 跡る 柱 時 針に 秋と さまぬ 巴州

月 影うけけ 秋 福の 法 徳 菊列

骨 折し 骨の なる たる 櫛の 皮 三樂

母を 上 座より 結 細 及 糸 富門

多の 影の や 尋 ね 人にも 三 玉の 帯 和木

雨の 嵐 巾 引 蓋の さ ぬし 子 木 枝

三方より獲りし金小貯つてハ守之

冬門に梅る神の銀持 紙水

けらきく四歌よせる基の所 五百枝

紙獨り送るよれの曙 和木

旅行く物を思ひぬかたの塔 富門

あふふ声を掛る昔菜 三葉

秋の古屋の調子よれる燈の由 東州

是も宿舎の山後を玉 巖南

喰ふこと神の長眠る金魚店 富門

あふふのよれ入る金魚の挿文 松根

日と経る東海道の 海ノ女 和木

子夕月のりて歌の紫雲 巴州

しよん久しく疎る細の江 如柳

赤土あふき祭る梅え 兼州

河の中にお居る酒賞は 巴州

あふふを耳に後る白雲 松根

生垣不切高き生てせとぬ岐 不百枝
 清しそ中後と衣脱すて 富門
 寂寂轉んと源氏を友ふそ友甚 巖南
 鳥并り見也玉根屏の鏡 如柙
 初夕の燈を浮し馬たしい 不百枝
 山より先を川暖むの秋 如柙
 東幣流何哉若同も二日月 守之
 解織ら初を原を流す清せる 和木

かし歌力そ疑ひぬのもうさるれ 三葉
 春の物そく蟹持し出歌 糸州
 鶴名地は九十毒そく為の友 糸州
 隙のぬるみ小夜を言ふ 松根
 筆とせそく可の聲く強生山 富門
 扇籠るに押さぬ宿うえ 巴州
 丸葉をさへ一燈の指をる 藤水
 寝るは太事な眠りおうさ 如柙

唯我の嵐ふさうの物衣柳 蒸州
喜樓身ひ帷子如 皺 三葉
杜若昔蒲子 端半して初生 巖南
ふ代の古き言に琴箏 赤州
角切女宴をまうせとあち無 瓢水
瀑の白り 春の夕月 和木
さう竿に家もあつる 菰搦 三百枝
籠の代きたあつて山吹 如柳

嘯けく浪多人 春よ海の面 巴州
枕次白り 襟をえ底は 瓢水
神馬ミウあも一鞭あよ 節ひ 赤州
雨雲か貫り 一糸の半 巖南
平しつてるも是ぬ枝の葉 松根
大津く白ふは 紫の版 和木
人常と娘あし 刺さるる 如柳
波の潮り 糸波も 笠 笠

宇と人の新活きく言々一洞龍養州
終り出合ぬ帳表り慈慈松根
野々越る山を川うき片月夜 崖南
園の家にな産き上_ニ下_ニ 瓢水
入わふ鶴啼ある古笠河 三葉
りこんく轉るまへも管庭 古之
かやた出く記入るまへも管庭 五百枝
姫も言ふまへも管庭の 曉 松根

名ヲ
六段を述べてく過る際胡蝶 東州
一葉を盡くす言 乞す紙 和木
鯉名ぬ音川 新の油櫃 葉州
縁の轉めけく仙人と云ん 三葉
植木好き下丸の縁ぬる龍鏡 崖南
素紡の裾に匠亀の首 富門
阿多忠院の假名く振舞紙の讀みき 巴州
信白中に居る風をうとく 如柳

冬に月風の手くある滝の聲 松根

その山を刻子瀬の松 瓢水

熊の干指の松 瓢水

森をくんで園を吹く風 和木

乱後り無理を忘る言多き 守之

その山通せんいふつづの田 富門

角水のほりて落るるに涼ぐすこ 和木

の藤より松の台の 夕陽 炭南

一竿の巨唐のつるく寺多き 子百枝

アガさうき毎う笠の毒路 巴州

帰アと来く又往ぬの神を 东州

ごん藤の中の付る信松 美州

所くの空も阿やれ花の逢も若 瓢水

万葉の香れせなる苗代 巴州

年賀

當所連中

友鶴の之新も記春色苑 白扇

糸禊よりよき多に聲也百多鳥 三樂

車座や一七編神のこつ物 松根

一糸の條百啗成之方吟ん 五百枝

七株の之友松やあまを皇 嶺南

其杖を百が突然新葉葉 巴州

歌やく免上首ニ平如奇木の苗 元浦

百々をよき世も深し此新 意祐

梅よりりりよき之も梅の花 菊水

穉人や松葉喜臥序も投 里仁

神ありて七の社や若くとも 夏雲

年賀
意のは人くともにもに怒す人まは
のひり初りけるの生るはけりん
あつた

十人節をまきし所のふは齡一は 蘭洲

他所之部

勢列亀田氏

芦舟

正年の葉秋尺せん金川の名

年加人

く也や融心川も融融福寄字 一枝

北在家

杖知くぬ海のまま一竹の秋 一枝

平津

月知知家の羽楓也七千をく 露竹

別府

夜崎や道ある人の名をくも 屋門

大久保

花も美色梅の木方や力足 寐舉

川原村

浦多姑和寄本すく名初の出 枕林屋

平野

之信み林の地一夜やまの松 如柳

世若井

稀人やまをまら余の名をく 御風

言破

小洲の治程を贈く男一 操州

日

筆の延新齡や八九間 晴山

平野

稀人や秀家喜の松の名 松風

氣と見れば巖のかたやたのま 古家所 木鶴

幾少代も鶴の羽衣あはれ花 風月

いふまなかりは澄り加吉の水 芦月 兵庫

追加

百まをくも問もあはし 申丹 権の子 中房

東をくはる中物ふ

ふくまを病けくふんに

西寺東

何半もあはく

屋友の

新ひき

瓢水

人々暖く春の日は
すねに赤鳥帽の世は
又春を人々の心は
春の記

春

春の月夜に心は
初春のや路中の水の
川風の川に流るや梅乃
和木
葉州

春の月夜に心は
初春のや路中の水の
川風の川に流るや梅乃
和木
葉州
春の月夜に心は
初春のや路中の水の
川風の川に流るや梅乃
和木
葉州
春の月夜に心は
初春のや路中の水の
川風の川に流るや梅乃
和木
葉州
春の月夜に心は
初春のや路中の水の
川風の川に流るや梅乃
和木
葉州
春の月夜に心は
初春のや路中の水の
川風の川に流るや梅乃
和木
葉州

赤鳥乃色少なまけり 美濃 乐州

二月廿

晦日夕 雷を短き 弥生 巴州

葛梅やを自古 海の春の雪 和木

夏

はひくと夏 回終すくよ 燕うね 和木

ほろくお 雨は少くは上の 霞を 瓢水

新よねくや 女りわくく 巴州

17の 柳々まけり心の 魚を志さるん 和木

涼さやん多 枕の春の 雲 三楽

五 影や馬少 解は 経 鞠子川 柔州

ひるかちや 皆今 新くと 女 瓢水

明るまを 明きの 門 氷 鷗外 柔州

秋

木 危く 何 秋 怪く 秋の 音 己州

鶴を詠うをりそ今五月三日 和木
さよふくの夢はあやむの聲 松根
一とせをけり月よ老ぬ一 巴州

隅田川よ

舟の音やひらりゆきを満ち 葉州
新鳥や 孫も中込るは雨 立
お月や 言ふは隣りぬ浪の音 立

冬

幸山より 時雨くやうけ汁 和木
ま川とまてぬきそかんて 初時 立

尾上ゆき

待りよと人やお雨の音とて 三葉
時雨くや 決り中込に信堤 和木
夜風の細き方や 鴨の聲 尾南

蘇軾詩集卷之八 蘇軾詩集卷之八 蘇軾詩集卷之八

蘇軾詩集卷之八

山清水澗也 蘇軾詩集卷之八

風也 蘇軾詩集卷之八

蘇軾詩集卷之八

如言一水田和亦翁者常風雅之情深

且今歲迎古稀之春秋而騷人好士之

祝吟多之焉予雖耻入其列然近鄉則

知之志不措故叙愚舌壽之以向上四

字而疊韻礎賦小律燕言備奏尾七招

君子笑噫々

水流廉子碧波清 田鶴翁風壽萬聲

和氣滿空稀古曉 木花潤色耀家

以抑句忠和秋聲

分。清。氣。絕。如。流。連。下。田。鶴。鳴。之。久。
和。の。操。主。福。受。本。此。之。故。也。

平津邨散人

平楚庸脩稿之

彪工

大坂心齋橋瓦町北横町

左梅市助

平成元年九月修補

10-10-16

